

偶然から始まった日本語学習

東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻

于 寧

日本に留学してから、日本語を勉強し始めたきっかけについてよく聞かれてきた。日本語をまったく視野に入れていなかったのに、日本語学科に入ったので、それは「運命」だとしか答えようがない。そして母の山口百恵と三浦友和夫婦への愛がもたらしたもののなのだ。

当時、大学出願票を記入した時に、外国語を専攻する発想はなかったので、当然、日本語を候補にすることもなかった。中国の大学出願票に、「希望する学部でなくてもその大学に入学する意思があるかどうか」という項目があり、「はい」とチェックを入れていた。そうしたら、第一志望校の南京大学に合格したものの、学部の希望は通らず、枠が余った日本語学科へ変更させられた。日本語を専門にすることはあまりにも予想外だったため、もう一年受験することも考えていた。その時に、日本語学科への入学を強く後押ししてくれたのが母だった。「将来日本語が出来るようになったら、日本に連れて行ってもらいたい。山口百恵さんと三浦友和さんに会えるかもしれないから、その時に通訳してもらおうわ」と。

1980年代に青春時代を送った母は日本映画の大ファンだった。当時中国に輸入された日本映画は一世を風靡し、多くの中国人が日本の映画スターに魅了されていた。母もその一人で、とにかく山口百恵と三浦友和夫婦が好きで、私も子どもの頃から二人に関する話を何度も聞かされていた。当時、日本語を勉強して何をするかは全く分からなかったが、少なくとも、山口百恵と三浦友和夫婦に会いたいという母の夢には役立つかもしれないと思い、とりあえず日本語学科に入学してみた。

入学して実際に日本語を勉強し始めたら、意外と早い段階で語学の楽しさを感じることができ、また、日本について知れば知るほど、日本の文化に魅力を感じるようになった。自分の選択ではなかったものの、日本語学科に入ってよかったと思うようになった。大学三年生の時に、長野県小諸市日中友好協会のご招待で、ホームステイの形で、一週間日本を訪問した。初めての訪日だったが、日本人の家に泊まり込み、市民祭りに参加することもできた。日本人の日常に溶け込み、肌で日本文化を感じることができた貴重な体験だった。教科書の限界を痛感し、日本をより知るために、日本への留学を決めた。

しかし、日本で何について研究するかには頭を悩ませた。日本に関心が芽生えてきたものの、アニメやアイドルが好きで日本語を専攻するようになった同級生と異なり、研究すべき分野を特定することがなかなかできなかった。ちょうど当時、「草食系男子」が日本で話題になり、中国のメディアにも取り上げられていた。自分も「草食系男子」だと同級生に言われるようになり、ジェンダー研究に関心を持つようになった。日本語学科の共催で毎年東京大学の先生たちによる集中講義が南京大学で行われていて、たまたまその年に今の指導教官がジェンダーの視点で映画を分析する講義を行った。私はその指導教官のもとで、ジェンダー理論と映画研究を専攻することを即座に決めた。

その後、「草食系男子」をテーマにした卒業論文を書き下ろし、留学選考に無事に合格して、今日本で勉強ができるようになっていく訳だ。日本留学のきっかけを聞かれる度に、自分が今に至ったのは一連の偶然の結果であったことを改めて認識させられる。偶然で始まったものが自分の人生の方向を左右するとは思わなかった。自分の選択ではなかったものの、正解に導かれている気はする。やはり、当時後押ししてくれた母に感謝なのだ。母を日本に連れて行ってあげて、映画で見た日本の風景を実際に見させ

てあげたい。可能性はほぼないが、もし母が山口百恵と三浦友和夫婦に会えることになったら、母の通訳になり、きちんと二人への愛を伝えるように努める。